

第 14 回 大学教育とワイルド

日本の近代教育制度に明治 5 年(1872)8 月の学制に始まる。その後、明治 12 年(1879)9 月に教育令が公布された。初代文部大臣である森有礼(1848-1889)は、これまでの全学校体系を包括した法令ではなく、学校種別ごとの新たな法令、「帝国大学令」「師範学校令」「小学校令」「中学校令」を次々と策定し、公布した。大正時代に入ると、谷本富(1867-1946)は自由教育運動の考え方を導入し、大正新教育運動として大きな流れを形成するようになった。英文学者だけでなく、文学者も大学の講義でワイルドに触れる機会があったことは注目に値する。

(1) 日本の大学教育

大正 7 年(1918)の大学令、高等学校令により、高等教育はさらに充実されるようになった。これまでの官立の大学から、公立及び私立大学の設置が認められるようになった。⁽¹⁾

また、明治時代に海外留学等をした日本人留学生が教員として大学の教壇に立ち、日本人によってその当時の最先端の学問を教えることになった。また、当時の学生はこうした教員の教えを受け、大きな影響を受けていたのである。特に東京専門学校(早稲田大学)からは日本のワイルド研究の先駆者いもいうべき本間久雄が輩出している。(本間の英国留学は昭和初期)しかし、本間久雄がワイルド研究者として突然登場したのではない。本間が学んだ東京専門学校には坪内逍遙をはじめ、増田藤之助、島村抱月も教鞭をとっており、まさに、当時の知識人の最高峰がそこにはいたといってよいだろう。教育の現場が研究を誘う場として進化した一端を伺うことができる。

(2) 増田藤之助

日本で初めてワイルドの作品が紹介された“The Soul of Man Under Socialism”の一部を「美術の個人主義」として抄訳した増田藤之助は、慶應

元年（1865）に伊勢の津で生れた。明治 11 年（1878）11 月に三重県師範学校附属小学校卒業後、ほぼ独学で英語を勉強し、10 代後半の明治 14 年（1881）9 月に伊勢新聞に入社した。当時は自由党の支持者で、激越の筆屢で伊勢新聞の発行停止を招くこと数回、特に明治 15 年（1882）の福島事件裁判終了の時には切なる同情を表したため、数週間の発行停止にもあっている。⁽²⁾ 明治 17 年（1884）5 月に群馬事件、9 月に加波山事件、11 月に秩父事件などまさに自由民権運動がピークを迎えていた頃である。明治 20 年 1 月には東京英語学校で英語・漢文を学び、明治 23 年（1890）3 月には『中外電報』の「日本の一大政治家」という懸賞論文に応募し、見事当選している。同年、国民英学会で教鞭を執る傍ら、『自由』の客員として論説などを発表していた。

「美術の個人主義」が発表されたのは明治 24 年（1891）5 月 28 日のことであつた。増田の生涯を見てみると、明治 23 年（1890）に国民英学会で教鞭を執るようになると、教育の道に除々に入るようになり、大きな転換期を迎えることになった。明治 25 年（1892）3 月には日本で本格的な語学雑誌『日本英学新誌』を創刊し、明治 27 年（1894）2 月には東京専門学校の文科で教鞭を執ることになった。東京専門学校・早稲田大学教師としての増田は、語学教師として全身全霊を尽くしていた。「坪内博士の純文学方面の指導に対し、文学の語学的表現を最も正確に適切に巧妙に譯出し、解説し評釈して、坪内博士の指導と相俟つて文学教育の完成を齎された」⁽³⁾とあるように、「文学の坪内、語学の増田」として早稲田大学での教育に携わっていた。さらに、明治 38 年（1905）には『英語青年』の編集顧問にもなっている。増田は政治的な活動に当初は身をおいていたが、その後早稲田大学にて教育に携わり、その教え子には日本のワイルド研究の第 1 人者である本間久雄がいるのである。

（2）島村抱月

島村抱月を取り上げると、その内容はおもに明治時代となる。それもどちらかと言えば美学者としての島村抱月である。本間久雄がワイルド研究に取

り組むようになった理由のひとつには、島村抱月の存在の大きさを上げることとは極自然のことである。

島村抱月は明治4年(1871)に島根県に父・佐々山一平、母・チセの長男として生まれた。名は瀧太郎。明治23年(1890)2月に上京し、東京物理学校、日本英学校、私立商業学校等で、英語、数学、理科等を学び、郷里の先輩である森鷗外(1862-1922)を訪ねて、進学の相談をしたこともある。明治24年(1891)6月に島村県那賀濱田町裁判所検事島村文耕の養子となり、島村と改姓。同年10月に東京専門学校文学科に入学した。この年に『早稲田文学』が創刊され、さらに坪内逍遙と森鷗外の間で没理想論争が起きていた。抱月は、逍遙と大西祝(1864-1900)との影響を強く受けたと言われている。明治27年(1894)7月に東京専門学校文学科を卒業。卒業論文「覚の性質を概論して美覚の要状に及ぶ」は、「審美的意識の性質を論ず」として改題されて『早稲田文学』(9月～12月)に発表された。

ここで、明治24年(1891)の東京専門学校の状況を見てみると、「島村抱月と美学」、あるいは「島村抱月とワイルド」との接点を知る手掛かりとなる。まず、増田藤之助が *The Soul of Man under Socialism* を抄訳したのが明治24年(1891)のことであった。同じ明治24年には大西祝(1864-1900)が論理、心理、美学、西洋哲学史の講義を擔当、翌年には小屋(大塚)保治(1868-1931)も美学を擔当した。抱月には日本の美学の先駆者である大西祝や大塚保治などの講義を受ける機会があった。抱月の美学への関心については、昭和55年(1980)の佐渡谷重信『抱月島村瀧太郎論』(明治書院)がよい参考となる。抱月が坪内逍遙や金子筑水(1870-1937)と共に『早稲田文学』の創刊に尽力したのも明治24年(1891)10月のことであった。

明治31年(1898)9月より東京専門学校文科講師となり、1年に美辞学、2年に支那文学史、3年に西洋美学史を講じた。抱月は明治35年(1902)3年にはイギリス、ドイツに留学。5月7日にロンドン到着。10月よりオックスフォード大学で聴講を開始した。明治37年(1904)7月にドイツに渡り、10月よりベルリン大学で聴講を開始した。明治38年(1905)6月にベルリンを經ち、

フランス、イタリア、イギリスを経て、9月12日に帰国した。10月より早稲田大学文学科講師となり、美学、近代英文学史、欧洲近代文藝史、文学概論等を講じた。留学中の抱月については平成10年(1998)の岩佐壮四郎『抱月のベル・エポック』(大修館書店)がよい参考となる。帰国後に早稲田大学教授となり、明治39年(1906)に『早稲田文学』を再刊した。再刊(第2次)の第1号には「囚われた文芸」を寄稿した。ワイルドへの言及はないもののラファエル前派などへの言及がある。

島村抱月の美学への関心は明治24年(1891)10月に東京専門学校に入学して以降のことで、坪内逍遙と森鷗外の没理想論争や大西祝による影響があったようだ。当時の日本の美学研究の様子を見てみると、明治22年(1889)にフェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908)が東京美術学校で美学・美術史の講義を始めている。明治24年(1891)には逍遙・鷗外の没理想論争によってハルトマン(Eduard von Hartmann, 1842-1906)を武器にした鷗外の審美学(美学)が知られるようになった。抱月は明治27年(1894)に東京専門学校文学科を卒業、その後は東京専門学校文科講師となり、留学直前に『新美辞学』を発表したのである。

日本の美学史について簡単に触れておきたい。まず、「世界で最初に独立した美学の講座が開設されたのは日本においてである」⁽⁴⁾という。これは美学が哲学の講義の一環として講じられてきた西洋とは違い、日本では美学が独立した学問分野として早くから位置付けられていたのである。日本での美学の始まりとしては、明治12年(1879)の『修辞及華文』(文部省)、明治16年(1883)から翌年にかけて上下二冊の形で出版された『維氏美学』(文部編輯局)の二冊を取り上げておきたい。『修辞及華文』は百科全書の一冊として刊行され、菊池大麓(1855-1917)によって訳されたものである。『維氏美学』はフランスのユージェヌ・ウェロン(Véron Eugène, 1825-1889)の『美学』(*L'esthétique*, 1878)を中江兆民(1847-1901)が訳したものである。「美学」の名称の起こりは本書からと言われている。しかし、何故、文部省が本書を選んで翻訳させたのかは疑問が残るところであり、森鷗外によれば、美術や文

学に影響を与えなかったと述べているのである。⁽⁵⁾

明治初期の美学あるいは美術といった所謂“art”をどうとらえるかは西洋文化をどうとらえるかにも繋がると考えられよう。美学の流れのほかにも「美術」という用語についても注目しておきたい。明治 5 年(1872)の西周(1829-1897)による『美妙学説』(御進講)、明治 15 年(1882)のフェノロサ『美術眞説』(大森惟中筆記)、同年には東京大学に審美学の科目の設置などの動きがあった。

抱月は日本で最初に本格的にワイルドを紹介した美学者であると言っても過言ではないだろう。日本の美学受容史については昭和 61 年(1981)の Doi Yoshio の“Bruno Taut in Japan” (*Aesthetics*. 2. The Japanese Society For Aesthetics)、平成 2 年(1990)の Kaneda Tamio の“NAKAGAWA Jurei und die japanische Ästhetik um die jahrhundertmende” (*Aesthetics*. 4. The Japanese Society For Aesthetics)、平成 2 年(1990)3 月の浅岡潔『美学史研究序説』(やしま書房)、平成 12 年(2000)4 月の浜下昌宏「実学としての美学——西周による西洋美学受容」、太田喬夫「大西克礼と講壇美学の特色」(神林恒道編『日本の芸術論——伝統と近代』ミネルヴァ書房)などがよい参考となる。また、大正 8 年(1919)の『抱月全集』(天佑社)は、昭和 54 年(1979)に日本図書センターより復刻されている。日本の美学の先駆者であり、抱月に多大な影響を与えた大西祝については明治 37 年(1904)の大西祝『大西博士全集』(第 7 巻、警醒書店：日本図書センターより復刻、1982)、陶山務『大西祝と内村鑑三—知と信の人間像』(笠間書院、1975 年 4 月)、平山洋『大西祝とその時代』(日本図書センター、1989 年 7 月)がよい参考となる。大西祝は東京帝国大学を卒業後、大学院に進学。修了後は東京専門学校に飽食した。大西は坪内逍遙と共に、早稲田大学の基礎を築き、金子筑水、中桐確太郎、島村抱月、綱島梁川等を育てた。美学者島村抱月の影響は、彼の教え子である本間久雄に見ることができよう。本間久雄が明治 42 年(1909)3 月に発表した「人生も自然も芸術の模倣也」でもワイルドの芸術観を *The Decay of Lying* から紹介したのである。

(4) 森鷗外

森鷗外は石見国（現・島根県）津和野に生まれる。本名は林太郎。津和野藩医の家柄で、鷗外は長子として誕生した。明治 3 年(1870)よりオランダ語、明治 5 年(1872)よりドイツ語を学び始めた。明治 7 年(1874)1 月に第一大学区医学校予科へ入学、明治 10 年(1877)に東京大学医学部の本科生となり、明治 14 年(1881)7 月に卒業した。その後は陸軍軍医となる。明治 17 年(1884)には衛生学研究の目的で、ドイツ留学を命じられ、明治 21 年(1888)9 月に帰国した。鷗外の文筆活動は明治 22 年(1889)頃より本格的に始まった。明治 22 年(1889)8 月には『舞姫』、『うたかたの記』などを発表、明治 24 年(1891)には『早稲田文学』誌上で坪内逍遙と没理想論争も大きな話題となった。明治 25(1892)11 月よりアンデルセン(Hans Christian Andersen, 1805-1875)の『即興詩人』の連載を始めた。明治 32 年(1899)には大村西崖と共に『審美綱領』（春陽堂）を出版するなど、美学の分野でも鷗外の名を轟かせた。これはハルトマンの *Philosophie de Schönen* (Leipzig, 1887)の翻訳である。

鷗外は明治 40 年(1907)には陸軍軍医総監、陸軍省医務局長になり、明治 41 年(1908)には文部省の臨時仮名遣調査委員会委員になり、明治 43 年(1910)には慶應義塾大学の文学科顧問などもつとめ、後年には帝室博物館総長、帝国美術院の初代院長などにも就任するなどの活躍を見せている。軍医、文学者、美学者として多彩な才能を発揮した。

(5) 大塚保治

大塚保治(1868-1931)は大学で、日本で初めて美学講座を担当したことで知られている。さらに大学の講義でワイルドを論じ、後年出版された昭和 11 年(1936)の大西克礼編『大塚博士講義集』（第 2 巻）（岩波書店）は、大正時代の「大学におけるワイルド」の一端を知ることができる。大塚保治は群馬県前橋市近郊の農家、小屋家に生まれた。小屋右兵衛門の弟で、明治元年(1868)12 月 20 日生まれ、明治 26 年(1893)に大塚正男の養子となった。明治

24 年(1891)に帝国文科大学を卒業し、大学院へ進学。同学年英文科夏目漱石が在学していた。また、寄宿舎の 2 年先輩には大西祝がおり、彼の推薦により大学院での勉強の傍ら、東京専門学校文学科でハルトマンの美学を講義した。明治 29 年(1896)に美学研究のためドイツ・フランス・イタリア 3 国に留学を命じられ、5 年間の留学後、明治 33 年(1903)に帰国、東京帝国大学教授となり、美術史や美学を講じ、日本で最初の美学講座を担当した。大塚は大正 4 年(1915)9 月から大正 8 年(1919)7 月まで文芸思潮論の講義をおもにボードレールとワイルドに絞って行った。『大塚博士講義集』(第 2 巻)の『文芸思潮論』によれば、大塚の講義の内容は「序説」「第 1 章 ワイルドの生涯」「第 2 章 ワイルドの人格」「第 3 章 ワイルドの作品」から成る。美学的アプローチが中心になっており、唯美主義の原理を解明しようと、作品の分析を行った。美学の講座でワイルドが講じられたことは注目に値する。この大塚の講義を当時東大の学生であった芥川龍之介が受けており、芥川が後年に未稿『サロメ』を残していることを考えると、興味深いものがある。大正 3 年(1914)11 月 14 日の原善一郎宛の書簡では「大塚さんと波多野(精一)さんは僕が一番尊敬してゐる先生です」、大正 4 年(1915)10 月 9 日の浅野三千三宛の書簡では「大塚先生が Wilde の講義をするのについて House of Pomegrante が少し入るのですが、御用済みならどうかして私の手もとまで御とづけ下さいませんか右御ねがい申あげます勿々」、大塚保治と同じように、明治時代に留学した森鷗外、島村抱月は同じように美学の分野で大いに活躍した。その後、森鷗外は『サロメ』を翻訳し、島村抱月は芸術座で『サロメ』上演にかかわっている。島村抱月は東京専門学校在学中に坪内逍遙、大西祝の指導を受け、その後母校の講師となった。このように美学を中心にスタートしたワイルドへのアプローチは、教育現場でも講義で取り上げられた。早稲田の学統を継いだ本間久雄や森口多里も『早稲田文学』に多くの論文を発表した。大塚保治の大学での講義をまとめた『大塚博士講義集』はアカデミックな場でワイルドが扱われたひとつの記録として大きな価値がある。

「大学教育とワイルド」は、大学というアカデミックな教育研究機関の果たす役割がまさに反映されることを証明することになる。明治時代に留学を果たした者が、帰国後に日本の大学で教壇に立つことにより、最新の学問をそこで教授し、その教授を受けた者がさらにその研究を進めることとなるのだ。坪内逍遙や大西祝の指導を受けた島村抱月。その後島村抱月、増田藤之助等の教えを受けた本間久雄が日本のワイルド研究のまさに先駆者のひとりであることは、まさにその典型である。また、大正時代に活躍した文学者についても影響を与えたことも注目してよいだろう。

参考文献

- 土方定一「森鷗外と明治美学史」（西周代表『明治藝術文学論集』明治文学全集 79、筑摩書房、1975 年 2 月）
- 陶山務『大西祝と内村鑑三——知と信の人間像』笠間書院、1975 年 4 月
- 平山洋『大西祝とその時代』日本図書センター、1989 年 7 月
- 佐々木隆「大正時代のワイルド受容」（『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001 年 6 月）
- 佐々木隆『書誌から見た日本ワイルド受容研究（明治編）』イーコン、2006 年 11 月

注

- (1) 大浦猛『教育原理』（山文社、1992 年 4 月改訂第 9 版）、p.47.
- (2) 増田綱「増田藤之助」（『英文学』第 4 号、早稲田大学英文学会、1952 年 10 月）、p.20.
- (3) Ibid., p.30.
- (4) 神林恒道『美学事始』（勁草書房、2002 年 9 月）、p.93.
- (5) Ibid., p.94.